(1)

2.

死

つどうしたんかいの――
注き叫ぶ耳の奥の声は
となり組のひと
たち罩めた塵煙の
きなくさい
はためきの間に
走り狂う影

あ

にげ
られる!
はね起る腰から
崩れおちる練瓦
燃えている
からだが
背中をうち倒した
熱風が
袖で肩で火になって

峠三吉 ②

2)

煙のなかにつかむ
水槽のコンクリート
水の中に
もう頭
みづをかける衣服が
焦げ散ってない
一生けんめい
からむ足の電線
材木、釘、硝子、
踏みぬける

瓦の壁
仏も
瞳孔もすてた
起っては倒れ
裸足は焼け
腕は萎え
背中に負はされているのは
溶けた鉛らしい
すでに火が黙い
われた頭に

電柱が壁土が吹きとむ
火と煙
の渦
つヒコちやんヒコ　ちやんし
倒れた
道の亀裂に（ほゝつけて）呼ぶと
にじむ泪
（あゝ　けさのわかれが）
腹でいざる煙の中
（さいごだつた　―　）
どこから出てきたのだろう
手と手をつなぎ
盆おどりのように
ぐるぐる廻るはだかのむすめたち
つまづき仆れる環の
瓦の下から
肩をのり出し迫る熱気に
のたうつ
をんなのかすれ声
道ばたの

たぬきのように腹ふくらせた
唇までめくれた
あかい肉塊たち
足首をつかむずるりと剝けた手
ころがった眼だけでさけぶ
しろく煮えた首
掌で踏んだ
髪の毛、脳漿
蒸し込める煙
ふつ、けてくる火の風

燃える体
灼けるのど
おい、もう
すいめぬ
くらい、ひとりの底で
きいろな、子どもの眼
どつと折れる腕
肩がめりこみ
こめかみの車音
とおざかり

あゝ
どうもたこと
どうしてわたしは
道ばたの
こんなところで
おまえからはなれて
死
なねば
ならぬ
のか